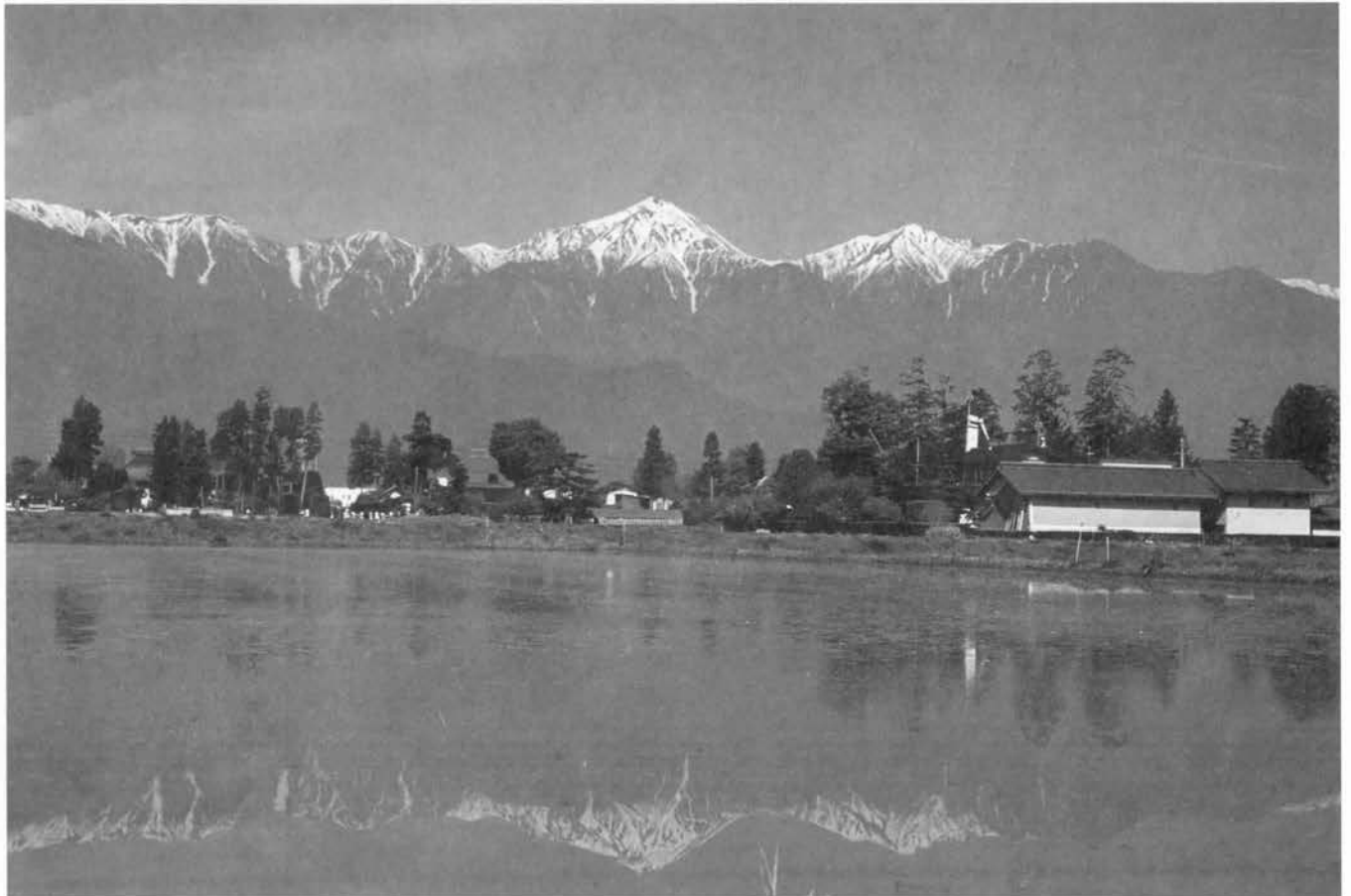


山と博物館

第49巻 第8号 2004年8月25日

市立大町山岳博物館



夏山の思い出 (写真は春、安曇野からの眺望)

文・写真 井口まり

初めて計画した山登りは蝶ヶ岳から常念岳だった。体力などなくせに、高校の修学旅行で登った快晴の立山からの眺めに、すっかり魅せられてしまったのだ。博多から新幹線で名古屋へ出て、夜行バスに乗り換え上高地へ。徳沢で時計を見ると一時間半も経っていない。ペースが速すぎたかと思ったときにはすでに遅く、長尾根の登りに入ったとたん、息が切れ始めた。しまいには十歩進んでは一休み、という状態になりながらも午後の雨が来る前にヒュッテにたどり着けたのは幸運だった。しかし初めての登山、しかも単独ということではコースを外してはいけないと緊張していたためか、気分が悪くなって夕食は入らなかった。翌朝、モルゲンロートの穂高連峰に感激したが、日の出とともに右手の大きな黒い塊が今日登る常念岳と判ったときにはガツクリきた。縦走路では八月だというのにダケカンバの若々しい緑が印象的だった。槍が近づいてくるのだけを励みに炎天下をよたよたと進み、大岩を回り込んだ所が思いもよらず祠のある頂上だった。しかし綿のTシャツを着ていたため、小屋に着いて汗が引くと寒気がしてまた気持ちが悪くなってしまった。夕食はいらなそうと言いつつ、結局食べることができた。最後の組にして下さり、結局食べることができた。こうして初めての山登りは無事に終わった。

以来、懲りずに登り続けている。今年、大町市民登山に同行し、二十三年ぶりにこの縦走路に出た。槍・穂高の大展望、お花畑や蝶ヶ直下のダケカンバは記憶のままに迎えてくれ、山を歩ける幸せをあらためて感じた。始めのうちはまだ山々を歩いて繋ぐことが楽しかった山登りだが、次第に草花や樹木、古道にも興味が湧いてきた。今では山関係の知り合いも増え、山と関わりながらの生活というものを考えるようになった。今後、私の山登りがどのように展開していくのか、ちょっと楽しみである。

(大町山岳博物館協議会委員)

・長野県立こども病院 麻酔科 副部長

安曇野のオオルリシジミ

丸山 潔



オオルリシジミ

オオルリシジミとは

オオルリシジミ *Sphimtaeoides divinus barina* (Leech, 1893) は日本と朝鮮半島、ロシア沿海州のみに棲息している。日本では本州と、九州に分布しその分布は非常に特異的で、

青森、岩手、両県の東北地方、新潟、長野、群馬三県にわたる本州中部地域、九州阿蘇山麓、熊本県九重火山地帯の大分県のみ分布している。しかし、東北地方の青森、岩手両県では一九七九年を最後に、最近の記録がまったくなく絶滅したと思われる。本州中部の長野県では、下伊那、木曾郡を除く全域に分布していて、隣接の群馬県西部及び新潟県妙高高原などに分布、しかし近年の衰亡は著しく群馬県では絶滅したと思われる。新潟県でも最近まで妙高高原町の自衛隊演習地で確認されていたがここ数年の記録がなく絶滅が危惧されている。長野県でも現在のところ、保護活動により安曇野と最近保護活動に着手した東御市での棲息となつてしまった。九州では大分県から熊本県にかけての久住高原、阿蘇山麓にかけて分布しているが久住高原では一九七八年以降確認されていないという。阿蘇山麓では牧場内に棲息している食草であるマメ科のクララは放牧牛が嫌うためか、おびただしく多く生育しオオルリシジミの生息環境にふさわしい条件となつている。熊本県では特定希少野生動物に指定されていて、阿蘇郡白水村では村民のチョウ「村蝶」として自然状態で保護されている。自然状態での世代交代は日本ではこの阿蘇山麓のみといつても過言でないと思われる。当地安曇野産では、人為的な保護活動を中止するようなことがあればたちどころに衰亡の危機が予想できる。

オオルリシジミは、年一回、五月下旬から

六月上旬に幼虫の食草であるマメ科のクララの成長に合わせるように出現する。まず、雄が現れ、数日おいて雌が現れ直ちにクララ周辺で交尾を行う。

雌は表面に黒いいくつかの斑紋を有することと雌雄が確認できるが、個体変化があり、ほとんどないか、あつても小さい個体も含まれ同定に注意を要する。

雌は、早いものは翌日から産卵をはじめることが決まってクララの若い蕾に一卵ずつ産卵し、氣にいった蕾には数卵産卵を繰り返す。産卵後、七、一〇日で孵化がはじまる。孵化した幼虫は体長にあつた大きさの、決まって蕾の付け根付近に丸い穴を開け食し、一回ごと移動し蕾をまるごと食べることはまずない。二令三令の脱皮は近くの葉や花穂の軸などで行われ三回の脱皮を繰り返し終令となる。若令幼虫からアリが群がるが、幼虫の腹部の後部付近より分泌される蜜線より蜜を分泌されるといわれているが、アリの誘引フェロモンにより誘引されると考えられている。しかし襲撃されることはまずない。シジミチヨウ科の多くの幼虫はアリとの関わりを持っていて誘引により各種天敵により身を守る一手段と考えられている。老熟幼虫になるとクララの花も満開となりこの中に緑から花に同化した白い色の幼虫が天敵から身を守ることく潜むが、多くは各種アリがまつわり容易に居場所が確認できる。

徐々に頭部よりピンク色に変わった幼虫はクララを伝い根際の石などの下や隙間に入り込み蛹化の準備にかかる。このときも多くはアリがまつわり付き、あたかもアリの巣に潜り込んだかのようにも見える。蛹化場所がき



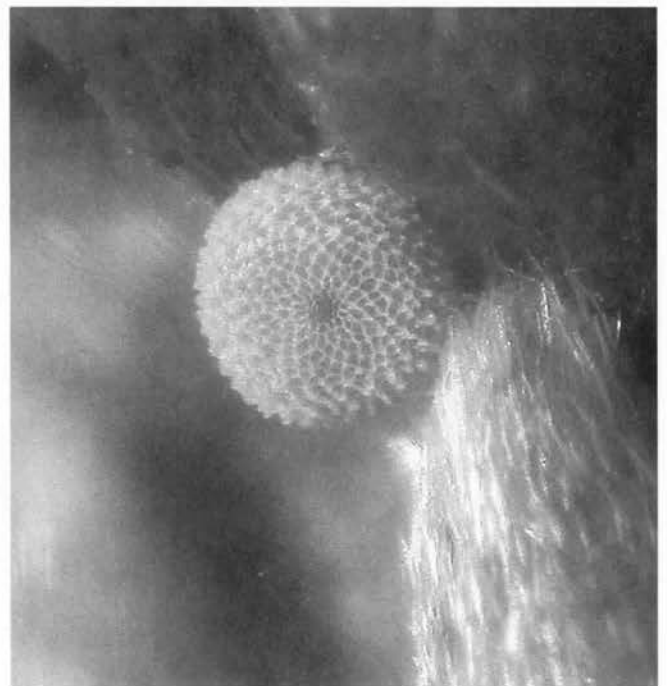
アリとオオルリシジミの幼虫



オオルリシジミの交尾



オオルリシジミの蛹

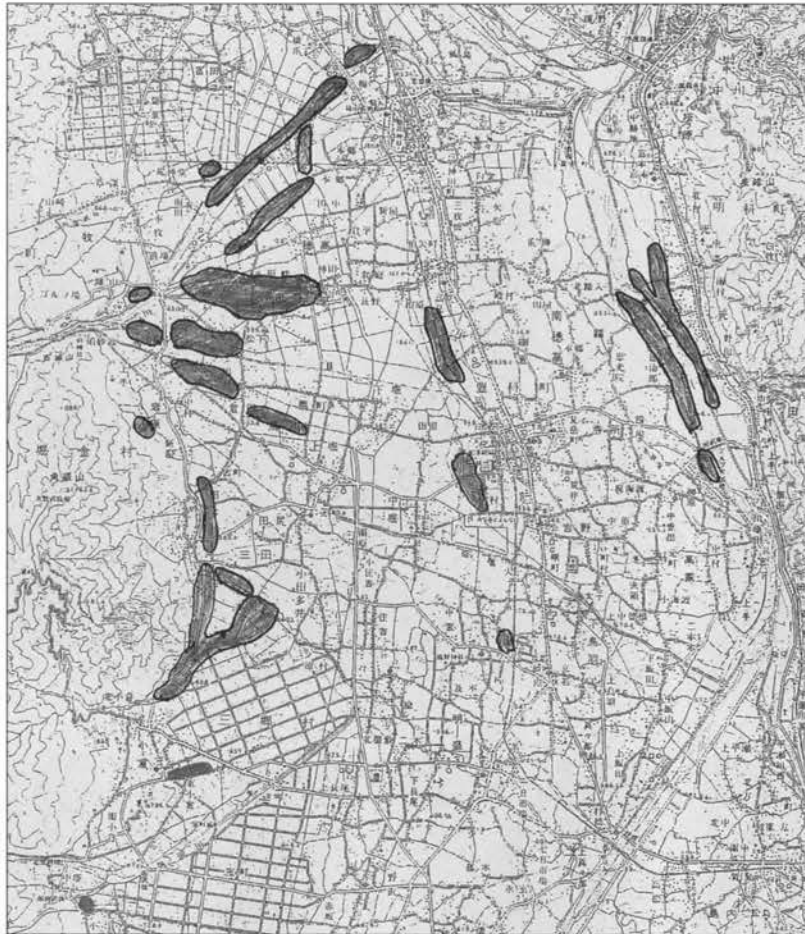


オオルリシジミの卵

安曇野における棲息変遷

まり静止した数日後に蛹化となり、はじめはきれいな白からピンク色だが次第に土の色に同化し茶褐色に変化する。アリは蛹になっても興味を示し、土をかけ隠べい行動を行ったり、土と蛹の間に隙間をつけた蛹室を作ったりし、蛹を守る行動が観察できる。これらのアリはキイロシリアゲアリとトビイロケアリで行動を観察できたが、推察するに約一〇ヶ月の長い間地表付近で無事過ごすための、世代を受け継いできた知恵ではないかと推測する。

オオルリシジミは食草であるクララの分布とともに棲息し、穂高町、堀金村、三郷村、豊科町、明科町に分布していた。北は烏川沿いの牧地籍から富田、乳房川合流までの両岸の堤防沿い、西山山麓にはとくに生息地が多く個体数も多くクララの花穂を食い尽くすほどの幼虫がいた場所もあった。南は小倉の室山山麓から細萱駅周辺まで生息。東は犀川の両岸の堤防に多く棲息し御法田のわさび畑の明科町まで分布をのばしていた。棲息場所は河川の堤防沿いや水田に取り入れるための用水路沿いや水田の畦、畑の石積み空き地、桑畑や畑の取り入れ道路沿いなど、人との関わりが深い場所に生息していた。農耕が牛馬に依存していたころ、牛馬の餌として田畑の畦の草を牧草としていたが、食草のクララに毒があり刈り取られなかったことがオオルリシジミの生育に好条件だったと考えられる。しかし、一九六〇年ころよりはじまった原野から田畑への開墾、田畑のほ場整備また河川の改修工事などにより、従来の棲息条件が急激に変わった。また、農機具の開発により田



安曇野におけるオオルリシジミの分布図

畑のクララが刈り取られるため、クララの株が衰弱し、また、種をつけないため分布が広がられず、この安曇野からクララが徐々に姿を消し、メタ個体群の維持ができなくなり、クララのみ依存していたオオルリシジミの姿も短い間に消えていった。

オオルリシジミの保護活動

一九九〇年ころには安曇野からオオルリシジミは絶滅したかと思われていた。ところが、堀金村、三田工業団地脇を流れる河川沿いや空き地、工場との境の土手などには昔ながらの植生が残り、ところどころにクララが成育

しなると細々とオオルリシジミも生きながらえていたのだ。この生息地を何人かの人が見守り個々に最後の生息地として手厚く見守り、保護の手を差しのべていた。この話が日本鱗翅学会自然保護委員会に伝わり、安曇野のオオルリシジミを守ろうと一九九四年に一名が発起人となり「安曇野オオルリシジミ保護対策会議」が堀金村役場に開催され、今後の保護活動の方針など検討された。この会議の中で「国営アルプスあづみの公園」の敷地内に以前の発生地があり、ほとんど当時と同じ環境と植生が保たれているのでここを安住の棲家にしたらとの話になり国営アルプ

スあづみの公園事務所所長に協力をお願いしたところ、全面的に協力していただくことになった。また、対策会議のメンバーに入っていただき、官民一体となった保護活動がはじまった。保護対策を講じているさなか、「安曇野でオオルリシジミが採集できる」と、マニアが県内外から駆けつけ成虫の採集、産み付けられたクララの若穂の摘み取りなどの被害が生じた。そこで、ボランティアを募り五月下旬から六月上旬の産卵時期にあわせ早朝から夕刻まで、採集者への監視体制に入った。地主の方や村役場の職員、派出所の方まで協力いただいた。一方、採集者には貴重なオオルリシジミの採集自粛と保護を理解していただいたが、狭い範囲での保護活動で夜中に花穂を摘まれる心配や、幼虫の天敵による被害など心配はつきなかつた。そこで、幼虫時期に取り込み蛹とし、翌春現地に戻す方法を考えた。現在では前方法と、母蝶に産卵させ、天敵から身を守るための防護ネット内にて蛹にし、翌年春、現地に戻す方法で個体の維持を行っている。将来は人の手をはなれ、安曇野で以前のように自然状態で飛び交う姿を夢見ている。

今後の課題

環境庁レッドデータブック絶滅危惧I類にランクされ、世界的に見ても貴重なオオルリシジミを後世に残すには、もはや人手を介さずには絶滅の一途をたどる。現在では、採集者問題や、オオルリシジミの各ステージにおける天敵などにより次世代を担う種における個体群の維持が難しい現状である。

この安曇野にオオルリシジミの復活を夢見るには「国営アルプスあづみの公園」エリア

での復活を源に、まず食草のクララの育苗からはじめ各所に破壊されたクララの群落を形成させ、オオルリシジミが行きかう環境作りから手がけることが肝心と考える。オオルリシジミ保護対策会議ではクララの育苗を手がけ各地にクララの復活を計画している。

最後に、この自然豊かであった安曇野に昔ながらの植生を復活しながら、人間と自然との共存ができればと願うものである。

(オオルリシジミ保護対策会議)

お知らせ

- 企画展「キノコ展」
たくさんキノコが展示されているよ。あんなキノコやこんなキノコ、見たことあるかな？
- 会期 九月三日(木)・祝日・二五日(土)
- 時間 午前九時～午後五時
(入場は午後四時三〇分まで)
- 会場 大町山岳博物館講堂
- 入場 無料
- 展示内容
・生キノコ約二〇点と写真による展示
・キノコの役割と生活史の紹介
・胞子紋をみてみよう！
(実顕鏡微鏡を用いて胞子の観察
・県内の中毒状況の紹介
・キノコ鑑定(三日および二四日)
・関連イベント
・キノコ学習会
- 二三日(木)に山岳博物館周辺の山で実地学習をします。九月七日(火)から電話にて申込みを受け付けます。詳細は博物館までお問い合わせください。

山と博物館 第49巻第8号

発行 二〇〇四年八月二十五日発行

〒201-8501 長野県大町市大字大町八〇五六―一
市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二一―二二二一
FAX 〇二六―二二一―二二二三
E-mail: sanpaku@city.omaie.hiroshima.jp
URL: http://www.2city.omaie-hakusan.jp/sanpaku

印刷 株式会社印刷
定価 年額 一、五〇〇円(送料共)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇五四〇―七二二三五三